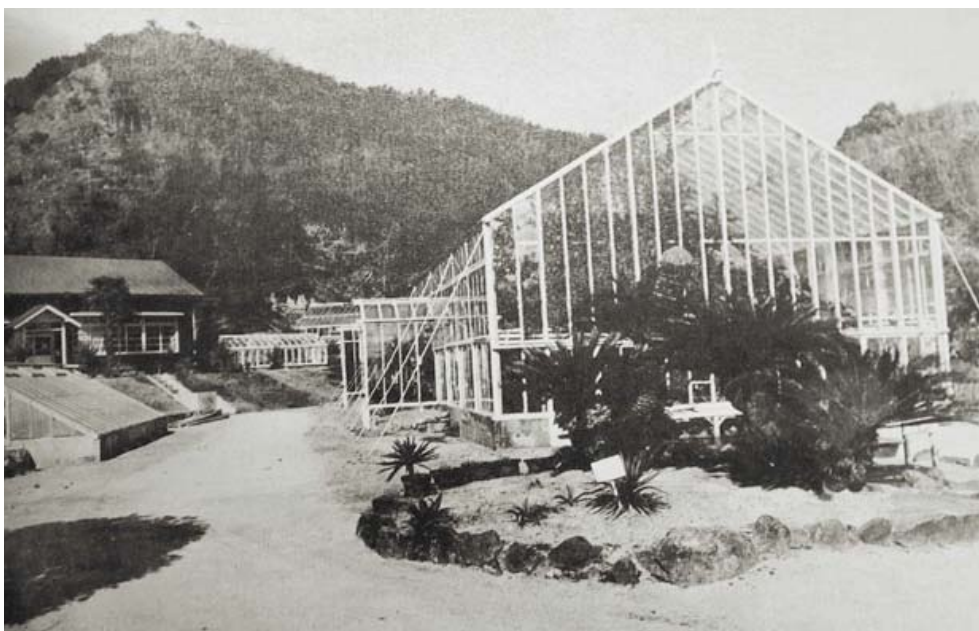


グリーンエネルギーの 植物園



1956年卒業アルバム掲載の「樹芸研究所」スナップ写真

（ ）

の写真には1955(昭和30)年頃の樹芸研究所加納事務所(写真左奥)と大温室(写真右)が写っています。樹芸研究所が伊豆半島の石廊崎のほど近くに誕生したのは1943(昭和18)年のことです。この大温室は1947(昭和22)年に千葉演習林産材を用いて建てられました。面積260㎡、高さ7mの木造ガラス張りで、当時としては大規模な温室だったそうです。翌1948(昭和23)年に、地下14.9mに自噴する温泉が掘り当てられました。泉質は塩泉で、噴出量は1分間に200ℓ、温度は100度以上と良質なものです。源泉は温室から320m離れています。自噴した温泉を高さ12mの槽の上に設置した槽に蓄え、高低差を利用して温室まで引いています。この温室は電気も燃料も使わずにグリーンエネルギー(温泉熱)を利用している近年はやりの「エコ」な温室であることをもっと宣伝すべきかもしれません。当時、温室内にはパパイヤなどの果樹やヤシがたくさん植えられていたそうです。そのころは、まだ植物園というものが珍しく、新聞等にも珍しい植物の記事が頻繁に掲載されました。イランイランの本邦初開花やカシューの本邦初結実などの新聞記事の切り抜きが残っています。そして年間二十万人の見学者が樹芸研究所の温室を訪れたといえますから驚きます。

この写真の紹介文を書くことをお引き受けして、私は初めて樹芸研究所に残る昔のアルバムを開いてみました。そこでは私たちも取り組んでみようと思っていたものから、思いもしなかったものまで、先人たちのいろいろの思いに触れることができました。

今私たちが情熱を傾けている事業もいつの日かこの写真の様に後進たちに顧みられる日が来るのかもしれない、そういう思いを馳せながら、開所70周年を迎えた樹芸研究所の歴史にあらたな一ページを刻んでいきたいと思っています。樹芸研究所ではそうした取り組みの一つとして、温室で育てているカカオ、キャッサバをそれぞれチョコレートやタバコなど馴染みのある食品に加工する体験型教育プログラムを実施しています。

樹芸研究所

鴨田重裕 所長